

富士大石寺による加賀藩への末寺建立願をめぐる

横山 雄玉

〔抄録〕

小稿は、近世加賀藩における大石寺信仰に対する禁令発令により、禁制となった大石寺から、加賀藩江戸藩邸に出願された末寺建立願の顛末を主題とする。

大石寺信仰への禁令は、末寺不存在による宗門行政の不都合が主因であり、末寺建立の出願はその理由解消を目指したものである。

この折衝に当たった聞番・半田権左衛門は、即刻却下の結論を伝達し、厳格な対処を行った。しかし、半田権左衛門、ならびに一連の経過に関与した前田将監、里見孫太夫、さらには庄田兵庫

に大石寺との接点が存在することが判明した。大石寺による出願は、一定の成算の下になされたものの、ある理由で頓挫し、半田権左衛門等の厳格な対応は逆に大石寺の側に立った対処であった可能性を指摘した。

五本の禁令が確認できる程に禁令下の大石寺信仰は拡大したが、悲願であった末寺建立は藩政期を通じて実現しなかった。

キーワード 加賀藩、大石寺信仰、金沢法難、新寺建立禁止、禁令

はじめに

近世加賀藩において、富士大石寺門流の信仰（以下大石寺信仰 今日の日蓮正宗）は分国法的な禁令によって禁止された。

周知のように近世の「日蓮宗」は、一致派と勝劣派^{①②}に二分され、行

政上、それぞれに触頭が設置され、管掌された。宗義上は本末関係でいくつもの門流が形成されたが、複数の門流が宗義を跨いで同宗の枠に組み込まれた。さらに言えば、「日蓮宗」は一致派、勝劣派を跨いだ概念としても使用され、日蓮系の諸門流は皆「日蓮宗」であった。

大石寺は近世において勝劣派の一本寺であったが、宗祖日蓮聖人を

根本の仏として崇拜するという所謂宗祖本仏義、二祖日興上人一人に日蓮聖人の正統が継承されたとする血脈相承等、他派との懸隔が大きかった。行政上は「日蓮宗」の枠内であり、勝劣派に属したが、他門流とは宗義上全くの別宗である。したがって、大石寺信仰を日蓮聖人の正統として信仰する以上、信仰者の側からは大石寺以外の「日蓮宗」を首肯することは困難であった。

加賀藩内における「日蓮宗」は、近世中期以降、羽咋妙成寺が触頭として一致派、勝劣派双方を管掌した。しかし、加賀藩領内に大石寺の末寺は存在せず、このことが大石寺信仰への禁令が発せられる最大の理由となった。

筆者は、禁令下における大石寺信仰の展開と実態解明を大枠の主題としており、先に大石寺信仰への禁令と関連文献の復元を中心に、発令構造の検討を行った。^③五度にわたる禁令が確認され、初度の禁令は卯辰慈雲寺（現在、法華宗真門流）の住僧、了妙が大石寺へ改宗したことによる騒動（以下「了妙一件」）を直因に、享保十一年（一七二六）十二月十三日に発令された。この主因が上述した末寺の不存在であり、享保十一年法令では「富士派之義ハ本寺有之事候得共、御領國にては右派之宗門前々より無之付て」とされた。

かかる情勢にあつて、大石寺では翌享保十二年（一七二七）三月、末寺不存在という禁止理由の解消と門流の公認を求めて、末寺建立を江戸加賀藩邸に請願した。しかし、即刻却下が結論であった。本件につき、元文五年法令の上申には「享保十二年本寺より願之趣有之候得共、御許容無之候」と言及されている。

本稿では、前稿からの継続研究として、この大石寺による末寺建立願の顛末を一覧する。そして、その周縁に関係した人物における大石寺信仰の状況を概観したい。

一 大石寺による末寺建立願の顛末

享保十一年十二月に禁令の発布という事態を受け、大石寺では翌享保十二年三月五日、江戸の加賀藩邸に末寺建立の嘆願を行った。江戸常泉寺の住持であった日義師が使僧となり、大石寺二十八世日詳上人の願書を持参した。しかし、結論としては即刻却下となり、三月七日には願書も返却され、末寺建立が実現することはなかった。

ここでは『富士宗学要集』^④（以下『富要』）に収録される関連文書①⑧^⑤（文書名は『富要』の名称を使用する）を掲出し、若干の考察をしたい。まずは一連の経過を把握するため、『富要』編者たる大石寺五十九世日亨上人の概説を挙げる。

金沢城下に於ける宗門の信仰取締は時に依り寛厳ありと雖も何れ安堵の見込み無く、一末寺を設くるの急務を感じて、当住日詳の願書を以て日義（常泉寺住）が使僧として江戸屋敷に出頭したる依り、大炊修理の両家老は大石寺の願書、問番（外交係）より両老へ提出したる状、使僧との談旨の案、使僧へ願書を返却せし状合四通の写を添へて国老及び奉行等に通達したる結果、宗門奉行は願意許容し難き法義を大老に陳情し、又更に江戸問番より国の両奉行に若し大石寺より公儀の寺社奉行に願ひ出でた時は如何にすべきやの用意まで申達し、両奉行よりは大石寺より爾後の使僧

江戸屋敷に來らざる由なれば本件は一先づ静まりたりとの旨を大老に報告して安心せられたるものの如し、大石寺が最後の手段を取らざりしは一は雄大藩を相手取るの自山の危険を案ずると同時に在金沢の多数の信徒の重刑に処せられん事を慮り、一は幕府の寺社奉行が唯一の大藩に対して厳乎たる処置を取り得べきやを顧みたるものか、爾後藩主代替り毎に末寺願を呈出したりとの事（文献は存せず）なれども執拗にあらざりしものか。^⑥とまとめている。

以下、関連文書を抄出して一覽する。（なお、各文書全文を史料として注記に掲出した。また、句点は適宜補った。）

ア 大石寺の出願と却下

①「江戸両老より大石寺願書等四通の写を添へて、国老奉行への状」^⑦

駿州富士大石寺より願の品之有り、（中略）御国に草庵を結び、宗義の邪正をも相糺し申す工面に付き、斯様の趣きは成り難き段、半田権左衛門挨拶に及び（中略）書付も相返し申し候、則大石寺書附、権左衛門紙面、且又使僧へ申述べ候趣き、何も写四通御目に懸け申し候間、寺社奉行、宗門奉行へ仰せ聞け置かるべく候、以上

（享保十二）三月七日

前田大炊判、^⑧前田修理判、^⑨前田近江守様、^⑩奥村伊与守様、^⑪横山大和守様、^⑫本多安房守様、^⑬奥

村内記録、^⑭村井主膳様、^⑮長九郎左衛門様、^⑯今枝民部様、^⑰本多図書様、^⑱津田玄蕃様、^⑲中川式部様、^⑳

①は江戸詰の大老である前田大炊と家老の前田修理が国元の大老、家老へ宛てた報告状で、寺社奉行と宗門奉行への伝達を依頼している。

内容は②大石寺願書の要点と、聞番・半田権左衛門の対応を記し、以下の②～⑤までの四通の写しを添えている。

②写の一、「大石寺願書」^㉑

日蓮宗駿州富士大石寺、謹んで願ひ奉る口上の覚。

（中略）御領国に於て数十年来、拙寺門流信仰の輩数多之有り候へども、末寺之無き故か、（中略）拙寺門流俱一統、御停止の御触渡し之有る由伝承候、（中略）近頃本尊等相返し候者之有り候（中略）御領国内に於て、旧地廃捨の内、或は寺号跡か或は院号坊号跡か、相応の地を拝領仰せ付けられ下させられ候はば、有り難く存じ奉るべく候。其子細は、富士大石寺は日蓮聖人正嫡古跡の霊場、数百年の今に至り、法水瀉瓶にて一滴の誤無き正法の門流、殊に御代々御朱印頂戴仕り罷り在り候（後略）

享保十二年未歳三月

大石寺当職 日詳
宿坊下谷常在寺

御役人中

（上包）上

駿州富士大石寺

②は大石寺よりの願書本体である。

内容は、今回の禁令に伴い、本尊等を本山に返却し、信仰を離れる信者が生じたことを歎き、末寺の建立を願うものである。同時に、大石寺が日蓮聖人の正嫡であり、公儀から朱印を受ける寺院であることを述べ、重ねて末寺建立の許可を願っている。なお、「御領国内に於て、旧地廃捨の内、或は寺号跡か或は院号坊号跡か、相応の地を拝領仰せ付けられ」とあることから、幕法の新寺建立禁止は熟知されており、廃寺等の再興、再建を念頭に置いた出願であったことが窺知される。

③写の二、「聞番より両老への報告」⁽²³⁾

駿州富士大石寺役僧の由にて日義と申す僧、御式台まで罷り越し、（中略）駿州富士大石寺願ひ奉り候趣き之有り、私を指し越し候委細は、願書に相記し申す通りに御座候間、御披見下さるべき旨申し聞け、一通の紙面相渡し候に付き、則一覽致し申し達し候は、惣て斯様の義、何品に依らず寺庵方より申し聞けられ候ても、都て取次申し候義仕らず候、（中略）右書附返進致し候由申し入れ、相達し候所、仰せ聞けらるる趣き具に承知致し候、然

り乍ら大石寺存念を以て、此度願ひ奉り候義、使僧として私申付越し候処、右御返し成され候ては、私申し分立ち難く迷惑に存じ候間、願の筋相立ち申さざる段は是非に及ばず候、右の所思召候て暫時御留置き下さるべく候、追て御返し成され候義は各別に御座候旨、再往申し聞け候に付き、（中略）右返達の時分猶又是より申し入るべき旨申し聞け候処、右通指置き罷り歸り候、以上。

（享保十二）三月五日

前田大炊様、前田修理様

半田権左衛門⁽²⁴⁾

③は聞番・半田権左衛門（以下本章内 半田）が、使僧日義師との応接内容を大老、家老へ報告したものである。

大石寺の願書を一覽した半田は、その願いが許容されないものであることを告げ、返却しようとした。しかし、日義師から即刻の却下は使者のつとめを果たせないで、不許可の結論はやむを得ないが、しばらく願書を留め置いてほしいとの依頼があったため、使者の立場に配慮し、一旦預かった上で返却する旨を伝え、使僧を帰した報告である。なお、「私を指し越し候委細は」とあるから、半田を指名しての出願に読み取れる。大石寺からは半田が聞番の職掌であることに止まらず、指名する理由が看取されるのであり、これは次章で検討する。

④写の三、「聞番より大石寺使僧へ談旨の案」⁽²⁵⁾

大石寺使僧相招き半田権左衛門申し述べ趣き。

一昨日御持参大石寺よりの御願の趣き、其筋一往御挨拶に及び候
通りにて、(中略) 則家老どもへ申し聞け、御書付も見せ申し候
処、御願の一件御法中よりは斯様に成されたく思召し候段御尤に
は候へども、此義は中将殿へ相達し候ても、決して許容仕られ難
き義に御座候、(中略) 宗義の所は如何様とも、改めの筋は国法
の義に候へば、(中略) 当時領国に流布仕る宗門の本寺、本山よ
り、役僧、使僧等指し越され候てさへ、謂れ無く逗留仕る義は堅
く禁止仕る義に候へば、(中略) 増して御一派の末寺の御下心に
て、寺僧等遣し置かれ候義は別して禁制の第一に御座候、此等の
趣き、御挨拶に及び候様家老ども申し聞け候、御持参の書付返進
致し候、

三月七日

④は、使僧日義師が来邸した二日後の日付が入った半田の口上案に
して覚書である。

ここで半田が述べる内容は、「一昨日の願書が許容されない旨伝え
たとおりであるが、たつての依頼で願書を預かったので、念のため家
老にも一覽させたところ、同じ見解であった。大石寺の思いは理解で
きるが、これは藩主に願っても許容されないものであり、まして昨年藩
法で信仰禁止が定まったところである。教義の可否は問うところでな
く、国法(藩法)であるから是非もない。また、藩領においては存在
する宗門の役僧が来た場合でも、故なく逗留することは禁じている。

末寺建立に向けて僧侶を派遣するなどのことは第一の禁制である」と
いうもので、家老も同一の見解であることを申し添え、願書を返却す
る旨が記される。

⑤写の四、「聞番より大石寺使僧を招きて願書返却の報告を両老への
状」⁽²⁶⁾

駿州富士大石寺役僧日義、当五日御式台まで罷り出で、大石寺よ
りの願書一通相渡し申し聞け候趣き、(中略) 右願書返進致し候
由申し入れ候通り、御覚書の趣き一々承知致し候、(中略) 何卒
御許容成され、宜く御取成し下され候様仕りたき旨申し聞け候に
付き、覚書の趣きを猶更申し達し候処、左候はば是非に及ばず
候、罷り帰り大石寺へ相達すべき旨申し聞け、右願書並に覚書と
も受取り罷り帰り候、以上。

(享保十二) 三月七日

半田権左衛門

前田大炊様、 前田修理様

⑤は、これも半田から大老、家老への報告である。

半田が使僧を招き、④を覚書として交付し、改めて願書を返却した
ところ、藩の意向を承知した上で、使僧は重ねて願いの趣旨を懇願し
た。半田が更に重ねて覚書の内容を伝えたところ、大石寺へ報告する
として、願書、覚書共に受領して帰ったことを報告している。

イ 加賀藩の対応

前節では三月五日の大石寺による出願、三月七日までの加賀藩による却下の対応を一覧した。

次に四月から六月の記録から加賀藩の動きを見たい。

⑥ 「宗門奉行より前顚末を具し旁最後の処置を大老への陳情書」⁽²⁷⁾

駿州富士大石寺より願の品之有り、（中略）右一卷御許容成され難き段、権左衛門申し達し事済み申し候へども、大石寺願書付の内、富士大石寺の義は、日蓮聖人正嫡古跡の霊場、数百年の今に至り、法水瀉瓶にして一滴の誤無き正法の門流、殊に御朱印頂戴仕り罷在候処、（中略）万一、江戸寺社奉行役人中へも、向寄を以て申し込み、表立て寺社奉行衆などより仰せ越され候品も御座有るまじく候や、（中略）寺社奉行衆役人中まで権左衛門罷り越し、大石寺願の書付並に御許容成され難き段、申し達し候趣き委細申し達し置き候はば、宜しかるべくや僉議仕り候に付き、各様まで申し上げ候、以上。

（享保十二）四月

戸田勤負⁽²⁸⁾、中村典膳⁽²⁹⁾、村中務⁽³⁰⁾
奥村伊与守様、横山大和守様、本多安房守様

⑥は、①によって②～⑤を披見した宗門奉行が、万一、大石寺が公儀寺社奉行へ陳情に及ぶ可能性とその対応を協議すべきかを大老へ問

い合わせたもので、四月に入り、金沢での動きである。

内容は、「半田の応対で落着いていると思われるが、大石寺願書に、大石寺は日蓮聖人の正嫡、朱印寺とあることから、落胆のあまり公儀寺社奉行に陳情し、公儀より問合せが来るような事態が想定されないか。元來領内に存在しない宗門であるから、差し支えはないと思われるが、念のため半田から公儀寺社奉行に申入をした方が良いか」というものである。

⑦ 「聞番より両奉行への状」⁽³¹⁾

公儀寺社御奉行役人まで申し入れ候義、再往御僉義の趣き承知致し候、御領国に古來より之無き宗義、今更願に候とても御貪著成さるべき様御座無く候、何方より申し来り候とも、往古より有り来らざる宗派に候故、御許容成され難き旨仰せ達せられて、訊立ち申す義に御座有るべく候、卒爾に寺社奉行役人まで相違し候はば、役人心得に承り置き候義も仕り難く、御奉行衆へ申し入れ候てはあなたにても捨て置かれ難く、大石寺へ御尋ねも之有り候はば、幸に仕り彼是願の筋申し出で、御奉行衆も御取誘之無く候ては、成り難き趣きに候は表立ち候て如何はしく御座候、若し寺社御奉行衆へ大石寺より申し込み候義之有り、あなたより申し来り候其節に至り相達し候義、又先き達て申し入置き候も同様に御座有るべく候、第一其以後使僧も罷り越さず候間、（後略）

（享保十二）六月十二日

前田将監様⁽³²⁾、里見孫太夫様⁽³³⁾、松原善右衛門様⁽³⁴⁾

半田権左衛門

⑦は、⑥に対応したものと思われる。⑥から二ヶ月程の時間が経過しているが、おそらくは、直接の折衝者として意見を求められた半田が、自身の見解を報告したものである。文書名は「聞番より両奉行への状」とあるが、宛名人は奉行ではない。前田将監は当時江戸留守居、里見孫太夫、松原善右衛門の両人は御用人である。

内容は「大石寺は古来から領内に存在しない宗門であり、大石寺の願いを却下しても問題はないと思われる。唐突に公儀寺社奉行に申し入れると、かえって事情を聴取され、大石寺にも問合せがなされた場合、これ幸いに願いの筋を申し立て、何かと面倒になることも考えられるので、こちらからの申し入れはしない方がよいと思われる。三月以来、使僧が来ることもないので、先方から申立があった場合の対応で良いのではないか」というものである。

⑧「奉行達より大老方へ状」⁽³⁵⁾

先頃仰せ越され候富士大石寺願の筋之有るに付き、寺社奉行衆役人まで、聞番より内証申し達し置き然るべき旨、宗門奉行中紙面の趣き、則聞番へ申し談じ候処、遮て此方より申し懸け候はば、還て如何はしく御座有るべく候や、其後の使僧等も参り申さず候へば事静まり申す様にも存ぜられ候間、詮義の趣き則半田権左衛門紙面上に申し候、以上。

(享保十二) 六月十四日

松原善右衛門、里見孫太夫、前田将監
前田近江守様、奥村伊与守様、横山大和守様、本多安房守様、
前田大炊様、奥村内記様、村井主膳様、長九郎左衛門様

⑧は、江戸留守居、御用人から、⑦の内容につき、半田の意見通りで良いとの見解を大老へ報告したものである。

以上が前節と併せ、『富要』に収録される末寺建立願一件の顚末である。ここだけを見ると、江戸藩邸の涉外担当たる聞番・半田権左衛門が、一義に及ばず却下し、大石寺に対しても強硬な意見であったように推測される。唯一の好意が使僧の立場に配慮し、願書を二日間預かったことであろう。これをまとめたものが次表である。

享保十二年 (表内○数字は文書番号)

3.5	3.7	4
大石寺日評、日義を使僧として加賀藩邸へ末寺建立出願 ②	半田権左衛門、談旨をまとめ、日義へ願書返却 ④	宗門奉行、大老へ対し、これ迄の経過と藩の意向を、公儀寺社奉行へ達すべきかの伺いを立てる ⑥
聞番・半田権左衛門、日義へ却下の結論を伝達の上、願書を預かり、本件を大老、家老へ報告 ③	半田権左衛門、右の次第を大老、家老へ報告 ⑤	
	江戸在番の大老、家老、以上を国元の大老、家老へ報じ、藩寺社、宗門奉行への通達を依頼 ①	

6.14	江戸留守居役、御用人、国元の大老へ対し、半田権左衛門の意見通りで問題なきことを報告 ^⑧
6.12	半田権左衛門、江戸留守居役、御用人に対し、宗門奉行より伺いの公儀寺社奉行への示談に付き、現時点では行わず、大石寺よりの陳情が存した場合に対応すべきと意見具申 ^⑦

しかし、周縁の人物に着目すると、上記の史料に見られない側面が存するように思われるのであり、次に検討したい。

二 周縁人物の大石寺信仰

ア 半田権左衛門

ここで、大石寺使僧、日義師と直接折衝をした聞番・半田権左衛門の周辺を一覧したい。結論を先取りすると、半田権左衛門自身が大石寺信者であった可能性を指摘できるのである。

「先祖由緒並一類附帳^{③⑥}」と「諸士系譜^{③⑦}」によれば、半田権左衛門は実名を正往、里見治左衛門与元の末子（あるいは三男）にて、元禄五年（一六九二）、末期養子で半田家の四百五十石を相続した。半田家の菩提寺は曹洞宗桃雲寺である。前章で一覧した文書^{⑦⑧}に登場する里見孫太夫は実兄である。ここで、血縁の実家である里見家に注目したい（本節末の系譜参照）。

この里見家は、次章で見る^⑨を受領した池田宗信^{③⑧}の主人に当たる。同時に、里見家の多くに大石寺信仰の事蹟が看取される。享保十二年（一七二七）当時、里見本家の当主は七左衛門元昌（千二百石）であり、半田権左衛門正往（以下本章内 正往）の甥に当たる。七左衛門

の室は神尾主殿（二千石 馬廻頭）の娘で享保七年（一七二二）「先祖由緒並一類附帳」は享保六年）十二月二十八日死去、大石寺の過去帳に「信壽院妙遠日詮」と記される。里見家の菩提寺は臨済宗の寶勝寺であるから、明らかに大石寺で授与された法名である。また福原式治^{③⑨}が享保六年頃の信者として「池田手筋 里見七左衛門 同奥方^{④⑩}」と記している。

次に、七左衛門の後嗣治左衛門言元は孫太夫の実子であり、これも正往の甥に当たる。宝暦十二年（一七六二）十二月二十日死去、大石寺の過去帳に「宗遠日唱居士」と記される。治左衛門言元は分家から本家を相続した。その分家を嗣いだ兵左衛門殷元（三百石 永井七郎右衛門（千七百五十石 先筒頭）二男 実兄正安の子傳七郎も大石寺から本尊を受持）は、享保十二年より二十年後、すでに大石寺信仰への禁令発令も四度に及んだ延享五年（寛延元年 一七四八）七月十五日、大石寺三十一世日因上人より本尊を授与され、金沢妙喜寺に現存する。

正往の実兄である里見孫太夫について、管見の限りでは明らかな信仰事蹟は確認されていない。しかし、前後の人脈から全く無関係とは考えにくい。

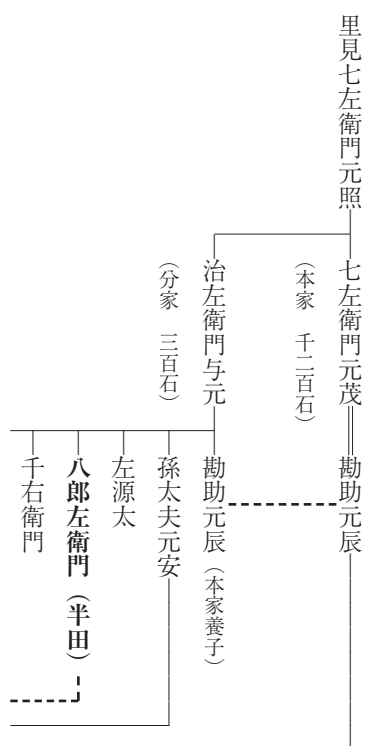
正往は享保二十年（一七三五）三月四日、五十三歳で死去した。正往自身が信者であった確証はない。しかし、前記の血縁に加え、正往の後嗣（実子）である権佐正方（正尚）が、里見兵左衛門と同時期の延享五年、日因上人より本尊を授与され、これも金沢妙喜寺に現存している。

以上を総合すると、大石寺信者の兄弟、甥、実子に囲まれており、状況証拠からは、正往自身、大石寺信仰を受持していたとの推測も無理がないように思われる。

これを前提として改めて前章の内容を見直すと、そもそも大石寺の出願は、前章③で見たように正往を指名して行われたと考えられ、正往の対処は大石寺へ配慮されたものにも読み取れる。すなわち、前章⑦⑧で公儀寺社奉行への示談を先送りにする所見を述べたのがそれである。

仮に公儀による裁定が存したならば、結論の如何に関わらず、藩邸の意向を反映させる余地は狭隘化し、建立不可の結論が維持された場合、以後の再願は絶望となろう。これを避け、再起を図るための対処であったと考えられる。そして、このことを大石寺へ報じ、改めての機会を目指したものであると思われ、次章⑨文書はそれを暗示しているようである。

（里見、半田略系譜）



「源八郎

半田権左衛門正往——権佐正方（正尚）

（大石寺本尊受持）

治左衛門言元（本家養子）

（大石寺法名 宗遠日唱居士）

左衛門殷元——孫太夫元成（妙喜寺蔵過去帳へ記載あり）

（大石寺本尊受持 永井七郎右衛門二男）

七左衛門元昌

治左衛門言元

（室の大石寺法名 信壽院妙遠日詮）

（大石寺法名 宗遠日唱居士）

——は実子相続

——は養子相続

……は同一人物

太字は半田権左衛門正往と大石寺信仰の具体的事蹟の存する人物

イ 前田将監

前章の文書⑦、⑧に登場する前田将監は、前田権佐恒頭（恒篤）のことである。「前田将監家系」⁴¹によれば知行三千七百石、大老前田美作守孝行の三男（四男とも）であり、前出の前田大炊の実弟であ

る。大石寺による末寺建立願直前の享保十二年（一七二七）三月一日より江戸留守居役となる。以後、七代藩主宗辰（当時世嗣）御附、小松城番などを勤めた。菩提寺は曹洞宗玉龍寺である。

その室は松平主馬康満（知行四千五百石）の娘であり、富と称した（大石寺過去帳の記載から）と考えられ、享保九年（一七二四）十一月二十五日に婚姻した。

富（蓮成院妙體日相 大石寺過去帳）の両親である松平主馬康満と妾蓮花院（大貳康済の生母であり正室扱いされたと考えられる）、主馬康満の後嗣である大貳康済は、享保初年頃より熱心な大石寺信者である。（菩提寺は浄土宗妙慶寺）これについても福原式治の記録に「松平主馬殿父子」とある。⁽⁴²⁾

「前田将監家系」に恒頭の子女は一男六女が記録される。成長した一男四女には皆大石寺信仰の事蹟が存し、四人の女子はそれぞれ自身の婚家へ大石寺信仰を継承した状況が看取される。特に、第四女正（是相院）はその孫（享和三年（一八〇三）の事例が存する）まで確実に大石寺信仰を相続した。

恒頭自身の信仰実態は詳らかではないが、享保十二年（一七二七）三月時点で富との婚姻から二年以上が経過し、長女万も出生している。富の大石寺信仰が認知されていないとは考えにくい。また、前述した恒頭の子女における享保十二年以降の史実から、禁制という藩内の社会情勢に応じた大石寺信仰への抑止力が作用したようにも思われないのである。⁽⁴³⁾

三 末寺建立願の背景

上記の検討を踏まえ、品川妙光寺文書から⑨「日詳尊師御書」を挙げる。

大事二候中二も況滅度後之当鋒ニて候間、成事ハ難候、不速成ハ親リニ候間、必々卒忽無之様肝心之中ノ肝心ニ候、午ノ年以來今年迄、八年ニ及中六年之間、右之感并仕候故、無仕様道理ニハ内証決を取り、永々決而不成ニ手切無之次第二成居申候、若手切レ仕様など候ハハ、全死人のことく何様之療治も不可届事ニ候、以今養生最中と御座被成候、扱只今此事之次第就、少々直ニ願出候ヘハ、又如先年ニ候、先年も庄田兵庫既堅請合被申候へとも御聞及之次第二成候、今迎も直願出候ハハ、本より敵多中ニ殊ニ近年者敵共も切入り御母公を能拵置候間、我等か沙汰を聞さへ仕候ヘハ、御母公を敵之第一ノ猛将とし此患へ陥候故、此方ハ前も仕様候ヘハ、此大卷之脈あがり申体を全憶病武者ニてハ無之候、可然一時ハくり可引時は引候事益と申行ニて候、乃至 此願之一段ハ緩ハ有利、急ハ損多と相考候間、同様ニ御座て候、恐惶謹言

二月二日

宗信遣⁽⁴⁴⁾

日詳判

本書は、末寺建立願を提出した日詳上人が池田宗信に宛てた書状で

ある。識語は二月二日のみであるが、「午の年（享保十一年）以来今年迄、八年」とあるから享保十八年⁽⁴⁵⁾（一七三三）に当たると推定される。

ここに「扱只今此事之次第就、少々直二願出候へハ、又如先年二候、先年も庄田兵庫既堅請合被申候へとも御聞及之次第二成候」とあるのは享保十二年（一七二七）の末寺建立願を指している。この文から三月五日の出願は、唐突なものではなく、一定の準備と成算のもとでなされたように思われる。すなわち、庄田兵庫が堅く請け合つたが末寺建立は成就しなかつたのである。ここからは、出願以前から日詳上人と庄田兵庫との間に何らかの接点が存したのは確実であり、庄田兵庫も信者であつた文面にも読み取れる。この庄田兵庫は、二人に可能性が存する。

一人は庄田兵庫孝溥（千六百石）。御近習御用を勤めた。もう一人はその後嗣である庄田孝正（五百石）。孝正は享保十五年（一七三三）家督相続し、兵庫と改めた。享保十二年当時の兵庫であれば孝溥であるが、本書の享保十八年（一七三三）時点は孝正である。何れの可能性もあるが断定できる材料もない。ただし、どちらにしても藩主に近侍した職掌であつたのは動かない。或は、庄田兵庫も半田権左衛門も内側から末寺建立への助力をしていたと思われる。本書の「一時ハくり可引時は引候事益と申行二て候、乃至 此願之一段ハ緩ハ有利、急ハ損多と相考候間」とは、兩人との示談内容を表しており、再願を所期したものと考えられる。

さて、本書に「今迎も直願出候ハハ、本より敵多中ニ殊ニ近年者敵共も切入り御母公を能拵置候間、我等か沙汰を聞さへ仕候へハ、御母

公を敵之第一ノ猛將とし此恵へ陥候」とある。ここからは、末寺建立願が頓挫した理由がほの見えるようである。この「御母公」は藩主吉徳の生母である預玄院（三田村氏 町）を指すと思われる。預玄院の生家である三田村家の菩提寺は曹洞宗長久寺である。しかし、預玄院は日蓮宗の篤信者であり、法名は「預玄院圓壽妙清日容大禪定尼」、江戸駒込長元寺に葬られた⁽⁴⁶⁾。建前は大石寺と同宗であるが、別物であることは上述（はじめに）の通りである。藩としての公式見解（末寺不存在により信仰禁止）以外に、大石寺末寺の建立に反対の勢力が預玄院の信仰信条に訴え、別次元の信仰である大石寺の末寺が建立されることを忌避した可能性が考えられるのではなからうか。

四 以後の伝承

大石寺による出願頓挫の後、加賀藩による大石寺信仰への禁令は、享保十四年（一七二九）、元文五年（一七四〇）、寛保二年（一七四二）、明和七年（一七七〇）の四度が確認される。このことは禁令下の大石寺信仰が相当の拡がりを維持して展開した証左でもある。

法令の法理からは、教義内容や信仰信条による禁止ではなく、末寺不存在による行政上の不都合が主因である。そして、法令が所期した浸透状況に至らないことから、布教行為の禁止を念記し、処罰条項が追加されるという経過を辿った。

かかる加賀藩内の社会情勢において、享保十二年以降、大石寺による正式の出願は現在の所確認されない。

ただし、折に触れての出願が為された伝承があり、金沢妙喜寺の所

蔵文書に次の一書が存する。

日蓮宗日興門流

富士山大石寺

乍恐今般奉仰

御任官願上候 御領国内拙寺御宗門二者 衆人之信仰無用ニ被為
仰付門中之諸僧 對宗祖等二不孝ニ相成 且他門之面目無御座
累年時節奉待候處 乍恐御賢察被下置 今般御幸甚之以御慈悲
志願等有之於人二者 信仰御免奉願上候 以上

寛政五年丑二月

大石寺

加州御屋鋪

御役人中

寛政五年（一七九三）二月の識語がある。実際に提出されたものか、案文のみかは詳らかでないが、十一代藩主前田治脩が寛政四年十二月十五日、参議に任ぜられている。「乍恐今般奉仰御任官願上候」とあり、この慶事に合わせての出願とすれば時期の整合性は認められよう。

ただし、末寺建立、大石寺信仰の解禁に至ることはなかったのが史実である。

おわりに

近世加賀藩における大石寺信仰は、伝播以来およそ半世紀は平穏であつたと考えられる。その形態は、信仰信条の異なる菩提寺との関係を継続しつつ、本心の信仰として大石寺信仰を希求するという二重構造を甘受せざるを得なかつた。信仰の二重構造を解消するには大石寺末寺が必須であることから、最大の心願はその建立であり、禁令発令以前から実現に向けた動きが看取される。⁽⁴⁷⁾

しかし、「了妙一件」を直因に、享保十一年（一七二六）十二月十三日に初度の大石寺信仰禁令が発令された。

禁制の法理は、末寺不存在による宗門行政の不都合であつたが、了妙が藩当局に答申した

御当地にて信仰の者数千人御座候⁽⁴⁸⁾

は刺激的であつたと思われる。

大石寺にあつては禁令を解禁し、信者の窮状を解消すべく二十八世日詳上人により、翌享保十二年（一七二七）三月五日に末寺建立が出願された。

この折衝に当たつた聞番・半田権左衛門正往は、直ちに却下の結論を伝達し、一連の対処に従事した。文献上、正往の対応は厳格であり、協力的には見られない。しかし、正往の周辺に着目すると、正往自身に大石寺信者の可能性が浮上し、一連の対処は大石寺への配慮とも思われる。また、一連文書に登場し当時江戸留守居役であつた前田将監など、禁令を熟知し、藩政に従事する立場を有する人物の大石寺

信仰に関わる史実が明らかになる。

大石寺出願の却下は、あるいは藩主吉徳の生母、預玄院の影響も考えられよう。

大石寺からは末寺建立は悲願であり、この実現が忘却されることはなく、その伝説も伝承する。この間、五度の禁令が発令されるという社会情勢の中、藩中の諸階層に幾多の信仰事蹟が存在する。しかし、藩政期を通じて末寺建立は実現せず、金沢への大石寺末寺の建立は明治十二年（一八七九）であった。

〔注〕

- (1) 法華経の前半「迹門」と後半「本門」を最終的に同等とする教義を立てる門流。
 - (2) 法華経の前半「迹門」と後半「本門」では本門が勝れるとする教義を立てる門流。
 - (3) 拙稿「近世加賀藩における大石寺信仰禁令について」（『佛教大学大学院紀要』文学研究科篇第四十七号所収 二〇一九年）
 - (4) 第八卷（堀日亨編 富士宗学要集刊行会（山喜房仏書林内）一九五七年）
 - (5) 『富要』収録文書は、大石寺、金沢妙喜寺に所蔵される「宗門所大石寺派一卷留帳」からの引文である。本稿では便宜上、『富要』収録文を用いる。
 - (6) 『富要』九―二九一頁
 - (7) 「江戸両老より大石寺願書等四通の写を添へて、国老奉行への状」（全文『富要』九―二九二頁
- 駿州富士大石寺より願の品之有り、一昨五日御式台まで使僧を以て書付指し越され候、其旨趣は、彼寺一派の宗義御国にも信仰の輩之有り

候へども、指し止め候様にと触渡し之有る故、本尊等相返し候者も之有り候に付き、宗門においての故障にも罷り成るべきやと此義を歎かしく存じ候故、御国に草庵を結び、宗義の邪正をも相糺し申す工面に付き、斯様の趣きは成り難き段、半田権左衛門挨拶に及び候へども、達て書附暫く留置き候様使僧申し候旨にて、指置き罷り帰り候故、則御内覧に入れ、決して御許容成され難き趣き、今日使僧相招き申し述べさせ、書付も相返し申し候、則大石寺書附、権左衛門紙面、且又使僧へ申述べ候趣き、何も写四通御目に懸け申し候間、寺社奉行、宗門奉行へ仰せ聞け置かるべく候、以上

（享保十二）三月七日

前田大炊判、前田修理判
前田近江守様、奥村伊与守様、横山大和守様、本多安房守様、奥村内記様、村井主膳様、長九郎左衛門様、今枝民部様、本多図書様、津田玄蕃様、中川式部様

- (8) 前田孝資。一万八千五百石。大老。叙爵後対馬守。（以下、人名の註記は「諸士系譜」、「諸頭系譜」、「先祖由緒並一類附帳」による）
 - (9) 前田知頼。五千石。家老。
 - (10) 前田直堅。一万一千石。大老。
 - (11) 奥村有輝。一万五千石。大老。
 - (12) 横山貴林。三万石。大老。
 - (13) 本多政昌。五万石。大老。
 - (14) 奥村温良。一万七千四百五十石。大老。
 - (15) 村井長堅。一万六千五百石。大老。叙爵後豊後守。
 - (16) 長高連。三万三千石。享保十六年大老。叙爵後甲斐守。
 - (17) 今枝直方。一万四千石。家老。
 - (18) 本多政冬。一万一千石。家老。
 - (19) 津田敬脩。一万石。家老。
 - (20) 中川長定。五千石。家老。
 - (21) 「大石寺願書」（全文）『富要』九―二九二頁
- 日蓮宗駿州富士大石寺、謹んで願ひ奉る口上の覚。

貴国、殊に前相公様より御慈恩を蒙り奉る義御座候故、御恩報謝の志相勤め候事、其旨趣御尋ね成し下させられ候はば、具に言上仕るべく紙面に尽し難く候、然れば御領国に於て数十年来、拙寺門流信仰の輩数多之有り候へども、末寺之無き故か、御停止の新義邪流の余類多く入り交り、然も名目は富士門流と申し粉らし、宗門御改めの筋相立ち難き由を以て、拙寺門流俱一統、御停止の御触渡し之有る由伝承候、夫故か門流の正義信仰の者どもより、自今信仰相止め候由にて、近頃本尊等相返し候者之有り候、右新義邪流は江戸表に於て御触渡しに付き、拙寺等より末寺どもへ急度申し渡し、相改むる義に御座候、然るに御領国に於ては、末寺之無き故、立宗の邪正顕れ難きに付き、仰せ渡さるるの趣き御尤至極に存じ奉り候、末寺之無き上は、誠に以て是非に及ばざる仕合に御座候、之に依て、今般憚りを顧みず願ひ奉り候趣は、御領国内に於て、旧地廃捨の内、或は寺号跡か或は院号坊号跡か、相応の地を拝領仰せ付けられ下させられ候はば、有り難く存じ奉るべく候。其子細は、富士大石寺は日蓮聖人正嫡古跡の霊場、数百年の今に至り、法水瀉瓶にて一滴の誤無き正法の門流、殊に御代々御朱印頂戴仕り罷り在り候処、若し御領国に於て信仰の義、急度御停止の様に成り候ては、門流の故障に罷り成るべきかと悲歎の至に堪えざれば、止むを獲ず今般出府仕り願ひ奉り候条、仰ぎ願くば御慈悲を垂れられ、旧地廃地を下し置かれ候はば、速に草庵を結び正流を顕はし候は、則御武運長久国家安全の御祈禱と存じ奉り候、随つて異風邪流も忽に相顕れ申すべく候、将又御領国に於て、数十年来累代信受数千人の者ども、富士門流の難洪御赦しに逮び、旁以て唯偏に御慈恵を仰ぎ奉り候、御大国の事故、定めて廢地の旧号も御座有るべき義と存じ奉り候。

乞ひ願くは宜く御許容下されられ、正法明に顕れ、邪流自ら除き候はば、拙僧は申すに及ばず、門中の真俗諸人一同歡喜身に余り、益す知恩報恩の丹誠を拙んで、御子孫繁栄御代万歳の祈誓懈るべからず候、只幾重にも御憐愍を仰ぎ奉り候、何の道にも早速御高聞に達させられ下され候はば、生前の大幸之に過ぐべからず、有り難く存じ奉り候。

候、以上。

享保十二年未歳三月

大石寺当職 日詳

宿坊下谷常在寺

御役人申

（上包）上

駿州富士大石寺

（22）

これに関する先行研究として、辻善之助『日本仏教史』第八巻 近世編之二 第十章第五節「寺院整理」（岩波書店 一九五三年）、圭室文雄『江戸幕府の宗教統制』（評論社 一九七一年）、大桑斉「幕藩制国家の仏教統制——新寺禁止令をめぐって——」（圭室文雄 大桑斉編『近世仏教の諸問題』所収 雄山閣 一九七九年）、朴澤直秀「新地建立禁令をめぐって」（『佛教史學研究』第六〇巻 第一号所収 佛教史學會 二〇一七年）等がある。

（23）

「聞番より両老への報告」（全文）『富要』九—一九三頁
駿州富士大石寺役僧の由にて日義と申す僧、御式台まで罷り越し、御役人方の内へ逢い申ししたき旨申し候間、罷り出で候様仰せ聞けられ候に付き罷り出で候処、駿州富士大石寺願ひ奉り候趣き之有り、私を指し越し候委細は、願書に相記し申す通りに御座候間、御披見下さるべき旨申し聞け、一通の紙面相渡し候に付き、則一覽致し申し達し候は、惣て斯様の義、何品に依らず寺庵方より申し聞けられ候ても、都て取次申し候義仕らず候、殊に以て御紙面の趣きに候へば、申し聞くべき筋に之無く候間、右書附返進致し候由申し入れ、相達し候所、仰せ聞けらるる趣き具に承知致し候、然り乍ら大石寺存念を以て、此度願ひ奉り候義、使僧として私申付越し候処、右御返し成され候ては、私申し分立ち難く迷惑に存じ候間、願の筋相立ち申さざる段は是非に及ばず候、右の所思召候て暫時御留置き下さるべく候、追て御返し成され候義は各別に御座候旨、再往申し聞け候に付き、左候はば御願の筋申し聞くべき為に預り置き申すにては之無く候、御自分御使僧として御出での所、仰せらるる分立ち申さざる義に候はば、御指置き候様

にも成さるべきや、右の趣きに候へば其段專（詮）無き義に存じ候由申し入れ候処、とかく右申し達し候通りに候間、暫時御預り置き下さるべく候、御取次仰せ上げらるる義は、罷り成らざる筋に候段は承知致し候旨申し候に付き、右返達の時分猶又是より申し入るべき旨申し聞け候処、右通指置き罷り帰り候、以上。

（享保十二）三月五日

前田大炊様、前田修理様

半田権左衛門

（24）半田権左衛門正往。四百五十石。聞番。

（25）「聞番より大石寺使僧へ談旨の案」（全文）『富要』九一二九四頁
大石寺使僧相招き半田権左衛門申し述ぶべき趣き。

一昨日御持参大石寺よりの御願の趣き、其筋一往御挨拶に及び候通りにて、斯様の品一向取次ぎ候義も仕り難き段申し達し候へども、先づ御書付暫時留置き候様に達て御申し聞け候故、則家老どもへ申し聞け、御書付も見せ申し候処、御願の一件御法中よりは斯様に成されたく思召し候段御尤には候へども、此義は中将殿へ相達し候ても、決して許容仕られ難き義に御座候、往古より中将殿御領国中には、大石寺派は僧俗共に之無く候所、近年末々の者など、江戸へ罷り越し候節帰依仕り候や、国許に於ても、数多内々にては信仰仕り候もの之有り候、畢竟宗義邪正の所は貪著に及ばず、古来より宗門改め候筋も右派は一人も之無き処、今更出来仕り候ては、改の筋に相障り申す義之有り候故、右の族之無き様領国中一統に先達て嚴重に申し渡し置き候、是以後も、若しいまだ此派改め申さざる者も之有り候はば、急度指止めさせ申す義に候条、兼て其御心得之有り候様に存ぜられ候、宗義の所は如何様とも、改めの筋は国法の義に候へば、少にても新規に出来る品は綿密に吟味を遂げ申す事に候へば、何分に御願ひ候ても成り難き筋に候間、此段思召し弁へられ候様に存ぜられ候、且又旧地跡跡の寺号等を用ひられ一宗を結ばれたき由、此義は猶以て成り難き事に御座候、当時領国に流布仕る宗門の本寺、本山より、役僧、使僧等指し越され候てさへ、謂れ無く逗留仕る義は堅く禁止仕る義に候へば、増

して御一派の末寺の御下心にて、寺僧等遣し置かれ候義は別して禁制の第一に御座候、此等の趣き、御挨拶に及び候様家老ども申し聞け候、御持参の書付返進致し候、三月七日

（26）「聞番より大石寺使僧を招きて願書返却の報告を両老への状」（全文）

『富要』九一二九四頁

駿州富士大石寺役僧日義、当五日御式台まで罷り出で、大石寺よりの願書一通相渡し申し聞け候趣き、先達て紙面を以て申し上げ候通に御座候処、右役僧招き、覚書を以て申し達すべき趣仰せ渡され候に付き、則今日相招き覚書相達し、右願書返進致し候由申し入れ候通り、御覚書の趣き一々承知致し候、最初より御意を得候通り、抛無き願の義に御座候間、何卒御許容成され、宜く御取成し下され候様仕りたき旨申し聞け候に付き、覚書の趣きを猶更申し達し候処、左候はば是非に及ばず候、罷り帰り大石寺へ相達すべき旨申し聞け、右願書並に覚書とも受取り罷り帰り候、以上。

（享保十二）三月七日

半田権左衛門

前田大炊様、前田修理様

（27）「宗門奉行より前願末を具し旁最後の処置を大老への陳情書」（全文）

『富要』九一二九六頁

駿州富士大石寺より願の品之有り、三月五日、御式台まで使僧を以て書附指し越され候に付き、半田権左衛門罷り出で、右頭の品取次ぎ候義、成り難き趣き挨拶に及び候へども、達て書付暫く留置き候様、使僧申し候旨にて指置き罷り帰り候故、則御内覧に入れられ、決して御許容成され難き趣きに付き、重ねて使僧相招き、御許容成され難き趣尚更申し述べ、右書付相返し候に付き、大炊殿、修理殿、御添紙面を以て、大石寺書付の写、権左衛門へ使僧申し述べ候口上書写一通、使僧へ権左衛門申し述べ候趣き写二通、指し越され候に付き、御渡成され披見仕り候、右一卷御許容成され難き段、権左衛門申し達し事済み申し候へども、大石寺願書付の内、富士大石寺の義は、日蓮聖人正嫡古跡の霊場、数百年の今に至り、法水瀉瓶にして一滴の誤無き正法の

門流、殊に御朱印頂戴仕り罷在候処、若し御領国に於いて信仰の義、急度御停止の様に成り候ては、門流の故障に罷り成るべしと悲歎に堪えざるの由相調へ申し候、右の趣に候へば、万一、江戸寺社奉行役人中へも、向寄を以て申し込み、表立て寺社奉行衆などより仰せ越され候品も御座有るまじく候や、尤御国法の義、其上只今まで右宗派の寺有り来り申さざる義に候へば、何方より申し来り候ても、御許容御座無き段仰せ達せられ、指問え申す義は御座有るまじく候へども、何角御貧着も御六つかしき義に御座候間、寺社奉行衆役人中まで権左衛門罷り越し、大石寺願の書付並に御許容成され難き段、申し達し候趣き委細申し達し置き候はば、宜しかるべくや僉議仕り候に付き、各様まで申し上げ候、以上。

（享保十二）四月

奥村伊与守様、横山大和守様、本多安房守様
戸田勲負、中村典膳、村中務

（28）戸田勲負方徳。七百石。宗門奉行。

（29）中村典膳克正。一千百五十石。宗門奉行。

（30）村中務愛清。四百石。宗門奉行。

（31）「聞番より両奉行への状」（全文）『富要』九一二九七頁

今度、駿州富士大石寺願書の趣きに宗門奉行中の存じ寄り御大老衆へ相達し候、之に依て公儀寺社御奉行役人まで申し入れ候義、再往御僉義の趣き承知致し候、御領国に古来より之無き宗義、今更願に候とても御貧著成さるべき様御座無く候、何方より申し来り候とも、往古より有り来らざる宗派に候故、御許容成され難き旨仰せ達せられて、訳立ち申す義に御座有るべく候、卒爾に寺社奉行役人まで相達し候はば、役人心得に承り置き候義も仕り難く、御奉行衆へ申し入れ候てはあなたにても捨て置かれ難く、大石寺へ御尋ねも之有り候はば、幸に仕り彼是願の筋申し出で、御奉行衆も御取誘之無く候ては、成り難き趣きに候は表立ち候て如何はしく御座候、若し寺社御奉行衆へ大石寺より申し込み候義之有り、あなたより申し来り候其節に至り相達し候義、又先き達て申し入置き候も同様に御座有るべく候、第一其以後使

僧も罷り越さず候間、旁以て右役人へ相達し候義は延引仕り然るべき様に存じ奉り候、是以後又使僧を以て申し来り候はば、其趣きに応じ詮議次第右役人まで相達し申す義も御座有るべく候、同役へも示談を遂げ候所、右同事に存じ候旨申し候、以上。

（享保十二）六月十二日

半田権左衛門

（32）前田将監様、里見孫太夫様、松原善右衛門様

（33）前田恒頭（恒篤）。三千七百石。当時江戸留守居。

（34）里見孫太夫元安。三百石。当時御用人。

（35）松原善右衛門一親。八百石。当時御用人。

（36）「奉行達より大老方へ状」（全文）『富要』九一二九七頁

先頃仰せ越され候富士大石寺願の筋之有るに付き、寺社奉行衆役人まで、聞番より内証申し達し置き然るべき旨、宗門奉行中紙面の趣き、則聞番へ申し談じ候処、遮て此方より申し懸け候はば、還て如何はしく御座有るべく候や、其後の使僧等も参り申さず候へば事静まり申す様にも存ぜられ候間、詮義の趣き則半田権左衛門紙面上に申し候、以上。

（享保十二）六月十四日

（37）「加越能文庫」所収 特 631-66 金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵。（刊本 石川県史資料 近世編 8-13 石川史書刊行会）

（38）宗信は法名であり俗名を金左衛門と称した。講頭職を勤めた中心信者の一人である。宝暦三年（一七五三）十一月十七日死去。法名、壽性院宗信日順（大石寺過去帳）。子息の一人、金助が大石寺に出家し、大石寺学頭・信領院日良師となった。（品川妙光寺等所蔵「御譲座」）

（39）享保初年頃の有力者の一人。この周辺については拙稿「近世加賀藩に

おける大石寺信仰禁教令の基礎的考察——福原式治・次郎左衛門の
同異説を中心に——」〔日蓮正宗教学研鑽所紀要〕第二号所収 二
〇一五年）で略述した。

(40) 妙喜寺文書

(41) 「加越能文庫」所収 特1631-160 金沢市立玉川図書館近世史料館所
蔵。

(42) 妙喜寺文書

(43) 本節の周辺は別稿を用意している。

(44) 「日詳尊師御書」『妙光寺所蔵古文書選集解説 一』六〇頁 妙光寺
一九九七年

(45) 享保十八年の比定は前注同所において検討されており筆者も同意する。

(46) 『加賀藩史料』編外編 五三頁 長元寺は一致派の日蓮宗。

(47) 前掲注(39) 拙稿(第三章 ロ『秘釈独見』をめぐる)にて少々触
れた。

(48) 『富要』九―二八九頁

(よこ)やま ゆうぎよく 文学研究科歴史学専攻博士後期課程)

(指導教員…今堀 太逸 教授)

二〇一九年九月三十日受理